

武將列傳三

海音寺藏

武將列傳三



五陽寺音涉

文藝春秋新社

三傳列將武



昭和三十五年七月二十日 初版
昭和三十六年五月三十日 三版

定價 二八〇圓

著者 海音寺潮五郎

發行者 車谷弘

印刷者 柳川太郎

發行所 文藝春秋新社

東京都中央區銀座西八ノ四
振替 東京 七八七四三

萬一、亂丁、落丁の節は、書店
または本社でお取換えます。
印刷 凸版印刷
製本 矢嶋製本

目次

豐臣秀吉

五

眞田幸村

六三

西鄉隆盛

一〇三

山中鹿之介

一五五

加藤清正

二〇五

平清盛

二五七

裝幀 杉本健吉

武將列傳三

豐臣秀吉

一

秀吉の前半生はほとんどわかっていない。諸太閤記の中で最も史料的价值の高い川角太閤記は本能寺の事變から書き出して、前半生には全然觸れていない。秀吉と同時代の竹中重門（半兵衛重治の子）の豊鑑とよかがみは、「尾張國愛知群中村郷のあやしき民の子なれば父母の名も誰かは知らん」という書出しで書いてはあるが、簡潔をきわめて、書いてないも同然だ。甫菴ほあん太閤記は相當くわしいが、明らかにウソとわかることが多いので、信用できない。

第一、生年月日からはつきりしない。天文五年丙申ひのえさる正月元日という説があり、同年六月十五日という説があり、天文六年丁酉ひのととり二月六日という説があり、一定しないが、ぼくは天文五年生まれであつたように思う。彼は幼い時「猿」と異名いみよされていたというが、それは生まれ年の干支えとから來たと思うからだ。天文五年は申年さるである。しかしながら、その異名も、顔つきから來たとも考えられるから、斷言しているわけではない。

年がわからないから、月日に至つては一層わからない。元日生まれというのは、彼が曠古の大英雄であり、大奸運の人であるところから、これほどの人物が普通の日に生まれるはずはない、一年のうちで最もめでたい元日の生まれであろうというところから考え出されたものであらう。うがつた考え方をすれば、生まれた月日はつきりしないから、こんな説も出たのだといえよう。秀吉の母大政所はずいぶん長生きした人で、朝鮮陣の時まで生きていたのだから、大政所に正確な記憶があれば、こんな様々な説の出るはずはない。何しろあやしき民だ。貧民には誕生日の記憶などないのが古今普通だ。大政所にも記憶がなかつたのであらう。しかし、これが正月元日という特別な日に生まれたのなら、いくら在郷の百姓婆さんでも記憶していないはずはなからう。元日に決定しないで各説あるのは、元日の生まれでなかつた證據になるとも言える。

太閤素生記と明良洪範にはこうある。

「秀吉は織田信秀（信長の父）の足輕木下彌右衛門の子である。母は愛知郡曾根村（素生記ではゴキソ―御器所―村）の生まれ。彌右衛門は戦場で負傷して身體不自由になつたので、愛知郡中村に引つこんで百姓となつた。二人の間に女の子と秀吉とが生まれたが、その後彌右衛門は病死した。母は織田家の同朋（お坊主・武家で使役する剃髮姿の給仕）の筑阿彌（あみ）というものが病氣のため織田家を浪人して中村に引つこんだのを入夫として迎え、その間一男一女を生んだ。男は後に大和大納言秀長となり、女は家康夫人朝日御前となつた」

この説は、渡邊世祐博士の「豊太閤とその家族」によると、秀吉の姉のひらいた京都村雲寺の瑞龍院書出しの木下家系圖と全く一致するから信用してよいとある。

しからば、秀吉の幼名は何といったかといえば、これまたはつきりしない。日吉丸なぞ説明するまでもなくウソだ。これは甫菴太閤記で使いはじめたのだが、大名の若君のような名前を貧農の子につけよう道理がない。こんな見えすいたウソを書くから、この太閤記は甫菴の生きている頃から評判が悪い。當時は秀吉の頃からの生きのこりの武士たちが相當居たのだが、その人々が、「虚妄多し」と爪はじきしているのである。

「猿」といつたという説もあるが、これはアダ名、あるいは呼び名だろう。改正三河後風土記には、「與助」といつて、どじようをすくつて賣つていたとある。

以上で、一應素姓だけはわかつたが、どんな工合にして成人して行つたかは、これまたわからない。甫菴太閤記では、八歳の頃、僧となるために同國の光明寺という寺に入れたが、學問佛道の修業にはまるで不熱心で、武ばつたことを好んで亂暴ばかりする。寺では持てあまして、家へ送りかえそうとした。すると、秀吉は、父が怒つてせつかんするであろうと思い、

「おらを送りかえしたりなんぞしたら、一々坊主共を打ち殺して寺に火をつけるべ」

と脅迫する。坊さんらは弱つて、美しい帷子かたびらや扇子などを持たせて、きげんを取り取り歸したと、現代ならまるで感化院入りの少年のような書き方をしている。作爲がすぎるようである。氣に入らない。寺に入れられたことは事實かも知れないが、幼年にしてすでに英邁えいまいの氣にあふれていたということを表現しようとしての小説くさい。

しかし、もう少し甫菴太閤記をたどろう。

かくして十歳の頃家にかえつたが、何しろ貧家だ。口べらしのため奉公に出したが、どこにも尻が

すわらず、遠江・三河・尾張・美濃四カ國の間を轉々として奉公してまわつた。

二十歳の頃、遠江の小大名で、駿河の今川家の被官である松下嘉兵衛尉之綱に仕えたが、これは武家なのでなかなか奉公ふりがよく、主人の氣に入りとなつた。ある日、松下が、

「尾州の織田家の家中では今どんな具足がはやつているか」

とたずねたところ、秀吉は、

「胴丸どうまるというがはやつています。これは唯今までの桶皮胴おけがわうちとちがひまして、右の脇で合せて伸縮自在でございしますので、便利であるとして、皆用いています」

と答えた。

「いかさまそれは工合がよさそうな。汝行つてもとめて來てくれぬか」

「かしこまりました」

嘉兵衛尉は金子五、六兩を渡した。

秀吉はその金をたずさえて尾張に向つたが、大功は細謹さいきんをかえりみずじや、あとで出世して恩返しすればよいはずと、その金を持ち逃げにしてしまつたと、完全に拐帶犯人にしてしまつてゐる。

甫菴太閤記では、秀吉はこの金で身支度をととのえて信長に直訴して小者として召抱えられることになつてゐるが、小者の身支度にどうしてこんな大金がいろう。金子五、六兩というと、金地金きんじがねで二十匁か二十四匁だ。現在の金地金の値段にして四萬五千圓か五萬五千圓弱だが、使用價值からいえば、百萬圓にも相當する。信ぜられない話だ。

太閤素生記では、十六歳の時、父がかたみとしてのこしおいた永樂錢一貫文から少しもらつて、清

洲の城下で木綿針を仕入れ、それを食べ物やわらじとかえつつ遠江に行き、濱松の町はずれ引馬川のほとりを白木綿の垢ついた着物を着てさまよっているところを、松下に見出されて奉公した。奉公ぶりがなかなかよいので、松下も氣に入つて納戸役まで申しつけたが、小姓共がこれをねたんで、こがな いんろう きんちやく小刀・印籠・巾着・鼻紙等、何か紛失すれば、
「猿があやしい」

「猿めがああたりをうろうろしていたぞ」

などと、あらぬ疑いをかけていじめるので、松下はふびんに思い、永樂錢三十疋をあたえて、これで本國に歸れと暇を出したとある。

豊鑑にはごく簡単に、十六の時ただひとり遠江國へさすらい行きて、松下につかえたとある。

要するに、信長につかえるまでの秀吉の閱歴はほとんどわからない。思うに繼父とおれ合いも悪ければ、口べらしの必要もあつて、年少にして家をとび出し、各地を放浪して歩き、その間に遠江で松下嘉兵衛尉に奉公したというごく大まかなことしかわからないのだ。松下への奉公は諸書の記述が一致しており、後年彼がえらくなつてから松下夫妻を招待して厚遇したという記録があるから信じてよからう。

この松下招待の事實も、改正三河後風土記では、秀吉は若い時與助といつて、どじょうなどすくつて賣つて生活を立てていた時期があるので、「太閤様はどじょう賣りの與助といわれていたのじや」と世間でいわれるのをいやがつて、自分も武家奉公をしていたことを示すためにやつた演出だと、はなはだ意地悪い書き方をしている。徳川家にとつては好意のもてない秀吉だからでもあ

うが、それ故にこそ鋭く事實をせんきくしているのだとも言える。

疑問は、秀吉ほどの人物の前半生が、どうしてこんなにあまいであるかだ。一體、ああいう異常な成功者は、その出世前のことを、それが悲惨であればあるほど、自慢ばなしとして語りがるものだ。ことに秀吉は陽氣な大ボラ吹きで、大言壯語癖のあつた人だ。大いに昔のことを語りそうなものであるのに、まるで語っていない。

思うに、信長に仕えるまでの秀吉の生活は悲惨にすぎて、彼自身が思い出すのも不愉快であつたのではなからうか。世は戰國だ。家を飛び出して放浪して歩く少年に、吹く風が温かろうはずはない。掻つばらいもしたろうし、泥棒もしたろうし、かたりもしたろうし、乞食もしたろうし、放浪する戰爭孤兒のような生活であつたろうと思う。

矢作橋上の蜂須賀小六との出会いや、小六の下についての盜賊行爲など、もとより事實ではないが、それに類したことはあつたにちがいない。松下からの金子^{きんす}拐帶^{かいたい}も、象徴的に描出したものとすれば意味がある。

こんな想像をするのは、信長に仕えてからの秀吉の奉公ふりが勤勉にすぎるからだ。できるだけ信長の目にふれようとして出しやばりもするし、氣に入られようとして實に無理な奉公もしている。同輩や先輩をおしのけて、口出しをするし、人が二の足も三の足もふむような困難な仕事を進んで引き受け、引き受けるや、遮^{しやに}二無^{むに}二仕上げてゐる。こういう働きは普通の生活體驗をして來た人にはできない。人生のドン底の經驗をして來て、再びあのいやな境遇に顛落したくないと、かたく決心している人にしてはじめて出來ることだと思ふのだ。

秀吉が社會の最下層から出發して、信長という伯樂^{はくらく}を得るや、急坂を駆け上るような立身をし得たのは、天稟^{てんひん}もあり、運の好きもあり、努力もまたあつたにちがいないが、根本的にはこの悲惨な經驗から來た覺悟のすわりにあると、ぼくは見ている。

二

信長につかえた年にも兩説ある。甫菴太閤記は永祿元年九月一日だというから、彼が二十三の時だ。太閤素生記は十八の時とする。前書では、信長に直訴して、實父がお家に仕えたことのあるものであると言ひ立てて、召しかかえていただきたいと嘆願したところ、信長は、

「面がまえが猿に似ているわ。氣輕できびきびしているようじや。心も素直であらうわ」と笑つて、召しかかえたという。

豐鑑では、直訴は直訴だが、信長が川遊びして歸る途中に待ちかまえていたという。

祖父物語では、信長の小人頭^{こびとがしら}の一人、一若^{いちわか}という者が中村の生まれであつたので、これの推薦で草履取りに召しかかえられたという。

いづれが正しいか、今となつては確かめようもない。確かなことは二十前後に信長に仕え、それはごく卑賤^{ひせん}な役であつたとしかれない。

かくして仕えたものの、彼の名が史料價値の高い史書に出て來るのは、彼が三十三歳の秋からだ。それ以前のことはすべて傳説的に語り傳えられたものばかりである。

彼が信長の草履取であつた時、實に忠實で、どんな時刻に信長が呼んでも、聲に應じて出て來たとか、寒夜に信長のはきものをおのれの背中に入れて温めていたとかいう話は有名であるが、名將言行錄にある話は何から引いたかわからないが、最も示唆に富んでいる。

秀吉は信長側近の小姓らに自分の名と顔を知られるために一策を案じて、小姓らの小便所の下に潜んでいて、上から小便をかけられると、

「何者なれば人に小便をしかけるぞ」

とがめた。相手はおどろいて、

「知らずしてしたことじや。かんにんせよ」

とわびる。すると、

「知りたまわらずしてのことなら、もつともなことでござる。いかにもかんにんしましょう」とゆるす。

相手は聞きわけのよい者じやと、皆知るようになったという。

小便所の構造がどうなつてゐるのか、それも一人くらいならだが、いく人にも同じようなことをしたとあつてはいぶかしい話だが、秀吉が早く出世するには早く信長とその側近に自分を知られるがよいとあせつたことは事實であろう。これはそれを具體的に表現したのだと考えれば面白い。

このほか、秀吉のこの時代の話はずいぶんあるが、すべて傳説的なもので、一々書いてははてしない。甫菴太閤記に伝えるものだけを簡単に書く。

その一つ。